

タイ RICD 訪問報告書

1. 訪問先 タイの Rajanagarindra Institute of Child Development (RICD)
2. 訪問時期 2024年2月14～2月18日
3. 目的 ①2021年7月からパートナー関係が始まった RICD を表敬訪問し、今後の関係強化に向けた情報、意見交換を行う
②車椅子を受け取った子どもの家庭訪問
4. 概要

タイの Rajanagarindra Institute of Child Development (RICD) は、タイ北部のチェンマイにあり、障害のある子どもへ各種支援（医療、教育、リハビリ、機器貸出等の各種療育）を行っている王室が支援する福祉機関（Institute）です。RICD が行う様々な支援はタイ国内にとどまらず、近隣のアジア諸国に及んでいるとのこと。その RICD の中で、子どもたちに車椅子を提供する活動を展開しているのが「RICD Wheelchair Project」です。

その RICD Wheelchair Project と当会は、「NPO 法人希望の車いす」を運営する谷理事長の紹介で2021年7月からパートナー関係が始まりました。2023年12月末までに、375台の子ども用車椅子を届けています。



Rajanagarindra Institute of Child Development (RICD) の外観です。特徴的なピアノ型の建物です。建物の前ではその姿がわかりませんが、遠くからは「ピアノ」だと気づかされます。子どもたちに寄り添っていこうという思いが感じられる建物です。（写真は RICD のホームページより）

5. RICD の組織と機能概要



- Servicing は子どもの最初のスクリーニング、診断を行っている（障害の度合い、種類、IQ などを確認している）。
- リハビリテーション・センターは、様々な設備と機能を有している
- 自閉症の子どもに対して、光を用いたリラクゼーション・ルームがあり、隣にアクティブ・ルームを設けている
- 玩具図書館は、貸出はもちろんだが、診断にも使われている。

6. RICD ツアーについて（2024年2月15日（木）13：00～14：00）

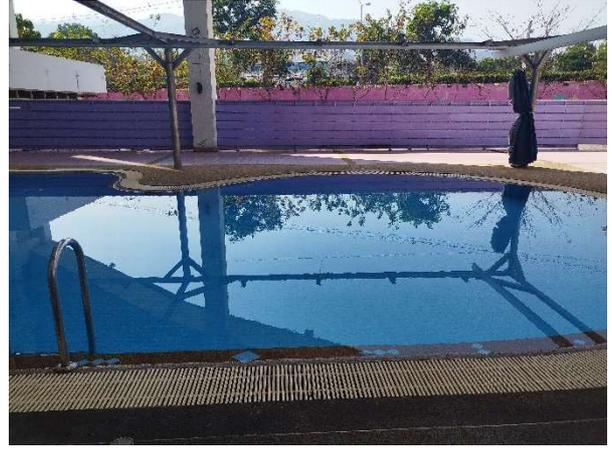


（左）タイ北部のチェンマイにあるRICDの全景です。下からではピアノの形の様子はわかりません。館内を丁寧に説明しながら案内をしてくれました。一言でいうと「障害のある子どものためになんでも揃っている」です。

（右）館内にある学校です。様々な教育が行われているようです。



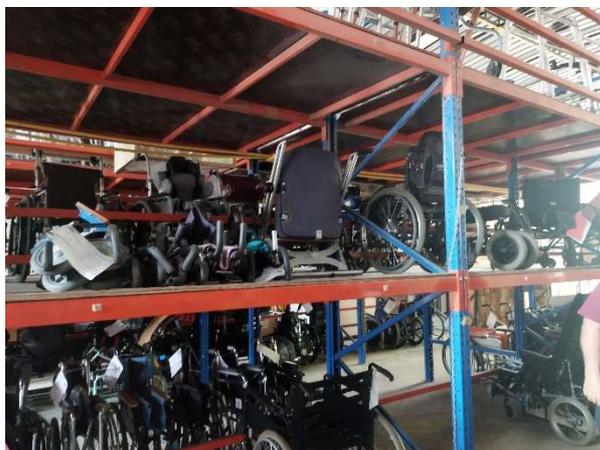
いろいろな音や光の刺激を子どもに与えて、落ち着かせるための装置がある「リラクゼーション・ルーム」です。隣には、「アクティブ・ルーム」がありました。こうした装置を考案するのは医者だそうです。



水を使った訓練や治療は重要と説明してくれました。屋内、屋外の2つのプールがあります。



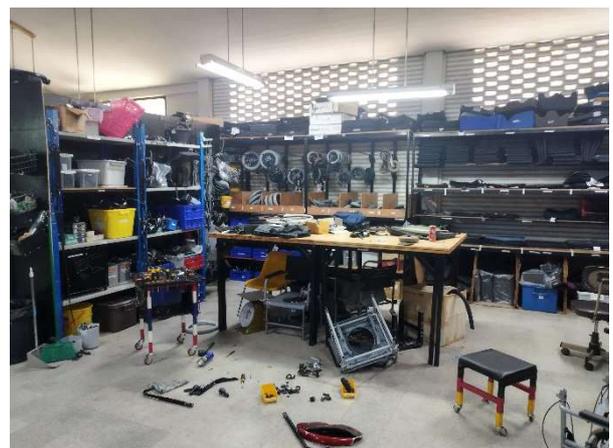
車椅子2~3台を中に入れて洗浄をする装置です。消毒液を使って殺菌も同時に行うことができ、その消毒液濃度も可変で選択できるようになっていました。洗浄して乾燥させるのに15分程度で完了するそうです。当会の現状の最大の悩みは洗浄です。このような装置を使用することで、車椅子を高効率に良い洗浄ができるだろうと思います。



車椅子の格納庫です。棚が3段に組まれていて、相当な台数を格納できそうです。



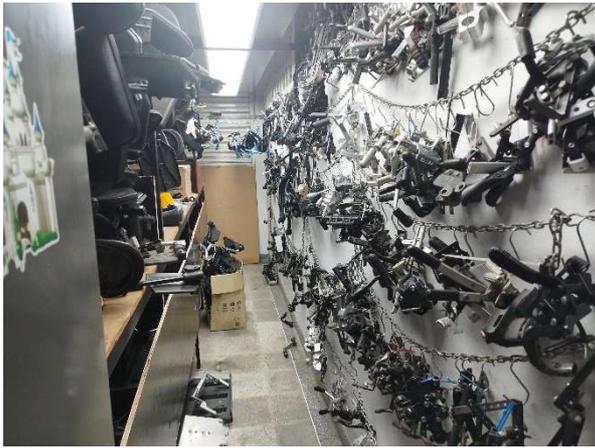
(左) 車椅子の修理室です。あらゆる工具と必要な部品が揃っています。
 (右) 作業用ツールボックスです。コロナ前までは、工具は作業者が共通で使うように一か所においてあったそうです。コロナをきっかけに必要な工具がこのボックスですべてそろえるように変更したとのこと。この環境改善により、作業中の移動距離が大幅に削減されたと容易に想像できます。



多くの部品が棚に格納されています。作業効率が良いと感じられました。左はフットレスト、右はフロントキャスターや、クッションが揃っています。



ワッシャー、ナット、ねじ類が様々なサイズのものが取り揃えられていました。

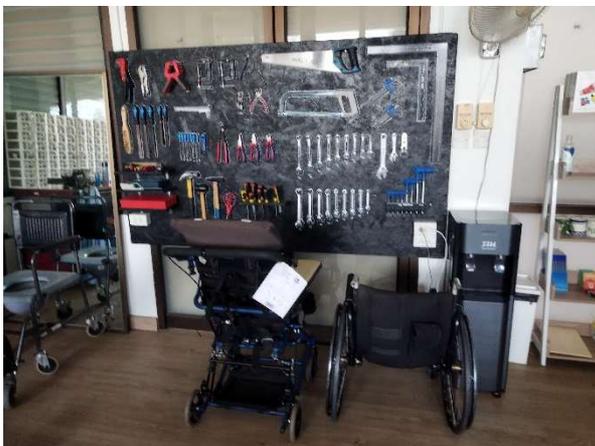


(左) 各種ブレーキの格納壁です。ブレーキは最も重要な部品です。これだけのストックの中から最適なものを選ぶことができるので、修理もスムーズにできると思います。
 (右) フレームをばらして錆を取る装置です。再塗装もするので新品同様です。



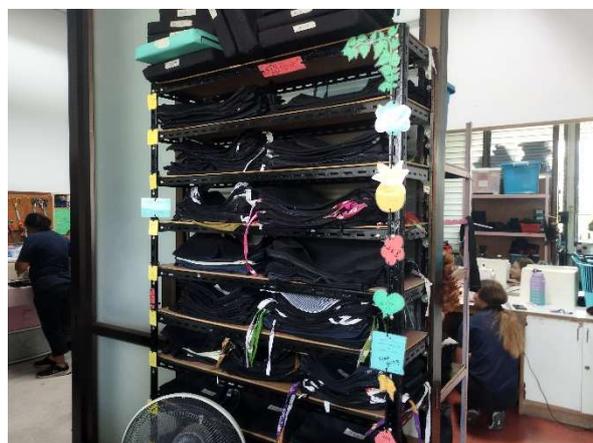
玩具を貸し出す「Toy・ライブラリー」です。単純に玩具を貸し出すこと以外に、ここに初めて来た子供に玩具を与えてその反応を見る診断にも使われているとのことでした。玩具が子どもの障害診断に使われることは知りませんでした。こうしたことの実践が、RICDが目指す子ども支援のありたい姿をイメージさせてくれます。

タイ国内に、RICDに似た施設が8か所あり、それらはすべてRICDを参考にして作られたそうです。日本国内の実情は不勉強でよくわかりませんが、同じような施設があると障害のある子どもたちの発達が進められ、その家族も喜びを感じられるのではと思いました。

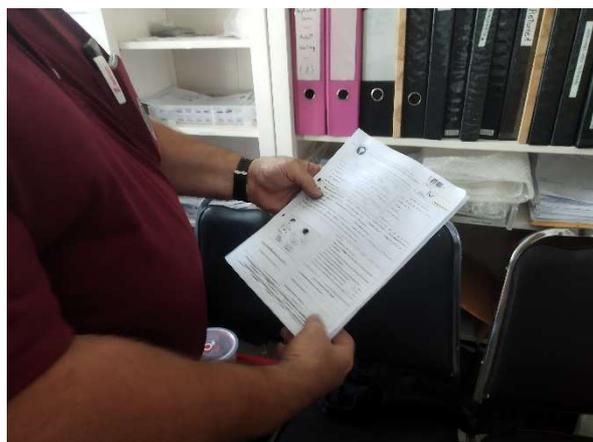
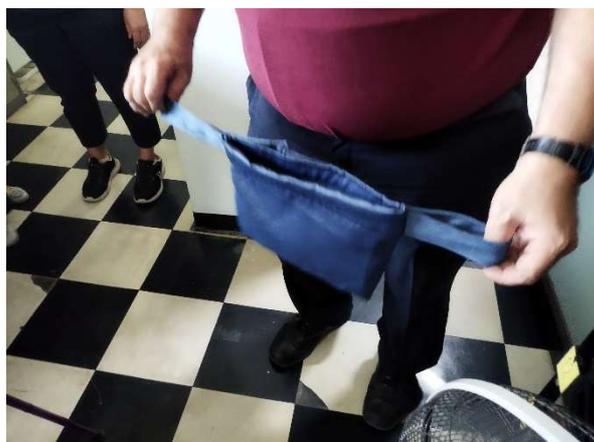


子どもに車椅子を供与する時に子どもの体に合わせるための部屋です。細かい調整をするための工具や、ベルト、バックルなどシーティングに必要なものがそろっています。

(シーティングとは、長時間座位を続ける方の心身機能や生活状況を考慮し、良好な座位姿勢が確保できるように、車椅子や椅子を調整することです。引用元：WAMNET)



車椅子の整備にはミシンは必需品です。ミシンを使って製作されたクッションやベルトが棚に積み上げられていました。ここから、それぞれの車椅子や子どもに合わせた布製品が使われます。



(左) 車椅子に乗ったまま排尿をする子どももいます。尿は専用の袋に貯められますが、その袋を以前は車椅子の外側に吊っていたそうです。それは車椅子の動作に悪い影響が出るので、この写真のような補助袋を考案したとのこと。両足で挟むようにこの袋を置いて、その中に尿袋を置くようにしたところ、車椅子が安定して動きが非常にスムーズにできるようになったそうです。

(右) 子どもと車椅子に関する管理シートです。これらのデータはすべてデジタル化され、サーバーに保管されているとのこと。

7. RICDとの情報交換（2024年2月15日 14:00～16:00）

（1）RICD No.2のDr. Dungとのお挨拶

医者でDeputy Director（次長）を務めるDr. Dungと挨拶をかわしました。彼女は、これまでの車椅子の提供に感謝するとともに、今回はようこそRICDへ来てくれました、と忙しい中にも関わらずコメントをくれました。当方からは、今回の訪問を受け入れてくれたことにお礼を申し上げます。



Dr. Dung（次長）が退出前に記念撮影に応じてくれました。

（2）RICDの活動紹介

プロジェクターを使って、活動内容が紹介されました。その内容は多岐にわたり、病院機能、療養機能、機器供与・修理機能などが紹介されました。

（3）当会の活動紹介

パワーポイントを使用して、当会の活動を具体的に紹介しました。車椅子の収集、清掃・整備、梱包、コンテナ積み込みに加えて、「子どもたちへ、動く自由と心の解放を！」という当会の考え方を端的に表すスローガンを紹介しました。

（4）情報・意見交換

- RICDは、車椅子をどのようにして集めていますか。
→世界中から寄付してもらっている。年間で大人用も含めて2,000台程度である。
- 車椅子に必要な部品は、入手できていますか。
→私たちはいくつかのパーツを作ることができますし、最近では以前よりも多くのものを購入することができるようになりました。それでも多くの様々な車椅子の交換部品を手に入れるのはかなり難しいことがあり、RICDとしては新たな部品入手の解決策を見つける必要があります。
- 車椅子プロジェクトのメンバーはどのような人ですか。
→タイ人もいるが、多いのは海外からのボランティアである。アメリカ、ドイツ、日本人もいる。メンバーは、RICDから収入を得る人はほとんどいない。それぞれの出身国の支援団体からの支援で生活を成り立たせている。

→RICD の医師などは、RICD からの給与を得ているが、一般の医師のレベルより低い収入で働いている。収入よりもここで働くことに意義を感じているからである。

→車椅子プロジェクトの責任者であるジョーイ・テル氏も米国からのボランティアである。彼は自分の父親も車椅子プロジェクトのリーダーであったので、2代目である。

→同様に、ドイツからの見学者の女性は姉が数年間ここでボランティアとして働いたので、自分もここで働くべきかどうかの確認のために RICD へ来ている。

• 車椅子に関する知識や技術はどのように教育していますか。

→修理技術は基本的に OJT で行っている。一方、車椅子の子どもの体への合わせ方（シーティング）などは、ロスアンゼルスでトレーニングを受けた人たちが教えている。

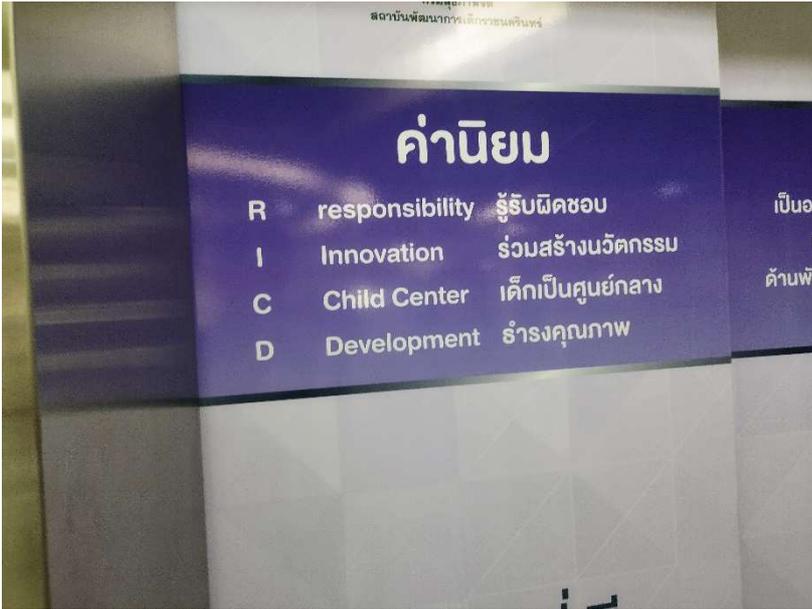


(左) RICD の活動内容をビデオで紹介してくれました。

(右) 筆者が、当会の活動をパワーポイントで紹介しました。



最後にお母さんがお礼の言葉を述べました。
(右端の女性です)



エレベーターの扉に書かれていた RICD のミッションです。

- R：責任
- I：革新
- C：子どものための場
- D：子どもの成長



玄関ホールに設置されている巨大なパンダ像の前で記念撮影しました。

この像は、当初ドラえもんにする企画だったのですが、高額な許諾料がかかるとわかって無料でできるパンダ像になったそうです。

こうした像の設置からも RICD が子どもに寄り添う姿勢を強く感じられました。

左から3人目が、富山からのお母さん、右端が車椅子プロジェクト責任者のジョーイさん。

8. 家庭訪問（2024年2月15日 9:00～12:00）

今回のRICD訪問の目的のひとつは、車椅子を提供してくれた日本のお母さんが、そのお母さんが提供してくれた車椅子を受け取った子どもに会うことです。2台の車椅子は、富山県在住のお母さんが、自動車に積み込んで自ら運転して福生市の会長宅まで届けてくれたものです。

その時に「この車椅子の送り先はどこになりますか。タイになりますか。タイなら自分が行って、この車椅子を使う子どもに会いたいです」と言われたのです。

これをRICDの車椅子プロジェクト責任者ジョーイ氏に相談すると、「素晴らしいアイデアだ。協力するから是非実現させよう」と言ってくれました。

○タイに発送する前に、「この車椅子を受け取る子どもに会いたいです」とコメントのタグを付けました。



○11歳の男の子の場合

1台目の車椅子の受け取り手は、寮で生活する11歳の男の子です。日常的に面倒を見てくれる肉親はなく、寮で生活していました。訪問先が寮生活をする学校であったために周りには多くの子供が集まりにぎやかでした。日本からのお母さんが、プレゼントを渡すと少しはにかみながらも笑顔を見せてくれました。



(左) 日本からのお母さんと彼女が提供した車椅子に乗る少年です。バイクの事故で障害を負いました。

(右) 車椅子に乗る子どもたちが、元気に少年や私たちを取り囲んでくれました。

また、ここには当会が送った車椅子に乗る子どもが3人ほどいました。確かに RICD が車椅子を届けてくれていることを確認出来てうれしくなりました。

(1台は2022年7月に送った上菅田特別支援学校からのものでした)

○6歳の女の子の場合

チェンマイの住宅地に両親と弟と暮らす6歳の女の子が2台目の受け取り手でした。生まれた時から脳に障害があり、目はほとんど見えず、歩くことはできるのですが、持続せず、倒れてしまいます。そのために車椅子を必要としていました。しかし、非常に元気な子で「将来は英語の先生になりたい」と話してくれました。



(左) 車椅子を受け取った子どもの家族と日本からのお母さんです。

(右) プレゼントしたクレヨンと自由帳を使って早速絵を描き始めました。ほとんど目は見えないようですが、クレヨンの色は目に近づけて判別していました。この家族は、われわれの訪問を受け入れるためにお父さんは仕事を休み、女の子は学校を休んで対応してくれました。

<日本からお母さんのコメント>

「今回の RICD 訪問のおかげで、車椅子を受け取ってくれた子どもたちに会うことができませんでした。遠いタイまで行った甲斐があります。それも、RICD と車椅子を送る会の皆さんのおかげです。短い滞在でしたが、今回のタイ旅行は忘れられない思い出であり、有意義であり、これからの生活を潤す旅行でした。

一方で、今回会うことができた2人の子どもたちの車椅子を使うことになったいきさつについては、心痛むお話でした。チェンマイ空港からの帰路の飛行機の中では、2人の子どもにたくさんのお幸あるように、心の中で祈りました。」

9. リハビリテーション・センター責任者との昼食会 (2024年2月16日13:00~14:00)



RICDの中核をなすであろう「リハビリテーション・センター」の責任者であるK. Oam 女史（写真右から2人目）が昼食会に来てくれました。

同女史から、これまで車椅子を送ってくれてありがとうございましたとお礼の言葉がありました。

そして、どのような車椅子がRICDにとって必要かを伺いました。普通の車椅子はもちろんだが、歩行器などの特殊な機器も送って欲しいとのことでした。できれば事前に写真で確認できるとありがたいとのコメントもありました。

10. 所感

今回のRICD訪問は、富山在住のお母さんの希望から始まりました。その希望の実現に全面的に協力してくれたRICDに感謝するとともに、RICD訪問の機会を与えてくれた富山のお母さんにも感謝を申し上げます。

これまでRICDに車椅子を送ってはいるものの、双方の代表者が会うことはできていませんでした。この機会にRICDを表敬訪問出来ると考え、表敬訪問とお母さんプロジェクトとのセットで準備をしました。本来であれば、会長の表敬訪問が望ましかったのですが、自営業で多忙な会長が数日間とはいえ海外に出かけることは難しいので、代理で小職が出かけることにしました。

RICDは、知れば知るほど優れた組織でした。当然ですが、組織だけでなくそれを構成するメンバーが善意あふれる人たちばかりでした。「障害のある子どもを支援したい」ということに全員の思いが集約されていると感じました。私たちから見ればRICDは、はるかに大きな存在です。求められる役割もおのずと異なります。しかし、少しで模倣のできる所や学ぶべきところを、海外の障害のある子どもたちのために今後の活動に取り入れていきたいと思います。そして、1台でも多くの車椅子を海外の子どもたちに届けたいと思います。

また、今回のRICD訪問で相互理解が大きく進みました。お互いの活動内容を紹介し、有意義な質疑応答の時間をとることができました。この相互理解を基盤として、今後とも大切にしていきたいパートナーであることの思いを強く持ちました。

以上